

# ● 第10回 浜松国際ピアノ コンクール

青澤唯夫

「浜松国際ピアノコンクール」は、1991年に浜松市制80周年を記念してスタート。3年ごとに開催され、2018年に節目となる記念すべき第10回を迎えた。

数々のフレッシュな新星を世界に送り出し、彼らの活躍はワールドワイドなものとなっている。このコンクールは、ヤマハ、カワイをはじめ楽器メーカーが数多く存在し、音楽の盛んな文化都市浜松の象徴的な事業になりつつある。

11月7日、前回2015年の第9回コンクール優勝者アレクサンダー・ガジェヴによるオープニング・コンサートに始まり、25日の入賞者披露演奏会で全日程を無事に終了した。このコンクールを題材にした恩田陸の小説「蜜蜂と遠雷」が大評判になったせいもあるのか、予選から連日大盛況だったようで、23日、24日のアクトシティ浜松大ホールでの本選はほぼ満席。会場は熱気にあふれていて、聴き手や大勢のボランティアたちも着実に育ってきている。本選は、高関健の指揮する東京交響楽団との共演によるコンチェルトで、ピアノの鍵盤と同数の全88人の出場者から勝ち残った6人の中の4人が日本人の男性。その健闘ぶりが特に目立った。コンクールにはもともと体調や運、不運も付きものだろうが、今回の努力や経験を将来に活かして、それぞれに大成を期待したいものである。

本選の初日は、務川慧悟がプロコフィエフの協奏曲第3番。無機的に響かない温かみのある音で、丁寧に弾かれた。各楽章の性格をうまく対比させ、リズムと力感を際立たせ、音色の変化が活きていた。経験不足のせい、ピアノの音がオーケストラに埋もれがちだったのが難点と言えようか。

安並貴史は、ブラームスの第2協奏曲。剛腕でガンガン弾くのではなく、抒情性や、時に室内乐的な味わいを感じさせる繊細な表現。その一方でエネルギーに豊かせる呼吸の巧みさなど、〈ブラームス弾き〉の資質もうかがわせた。技巧、体力ともに要求される大作だが、テンポ設定やその変化が平板に過ぎ、曲全体を力強く構成するには至らなかった。

牛田智大は、ラフマニノフの協奏曲第2番。音が美しく、彫塑的に立ち上がってくる。曲の聴かせ方も堂に入っていて、メロディーを魅力的に歌わせ、郷愁をかき立てる。まとめ方、演奏表現の要諦も心得ていて、まだ19歳と若いのに、豊富な演奏キャリアを物語るプロフェッショナル級の力量を示した。客席を熱狂させ、〈聴衆賞〉を得たのも当然と思われる。

第2日は、今田篤がチャイコフスキーの第1協奏曲。パワフルで、意気盛んな力演。独奏パートはマイペースで入念に弾けるのに、オーケストラと協調する手腕に不慣れの面もあった。緩徐楽章では自分の音楽を快適に聴かせたけれど。

イ・ヒョク（韓国）は、ラフマニノフの協奏曲第3番。高度な技巧を備えたよく動く指で、颯爽と音楽を紡いでゆく。物怖じしない舞台度胸と、積極果敢に攻める才能がある。音楽の自然な推進力や表現密度の向上が課題だろう。

ジャン・チャクムル（トルコ）は、リストの第1協奏曲。硬質で粒立ちのよい華麗な音色が、リストの音楽の特質を活かし、曲の運びや仕上がりも秀逸。作品を知り抜き、言いたいことははっきりして、それを自分の音できちんと表現できていた。

審査委員長は小川典子。副委員長がロナン・オホラと迫 昭嘉。委員はポール・ヒューズ、ヤン・イラーチェク・フォン・アルニン、アレクサンダー・コプリン、ムーン・イクチュエ、エリソ・ヴィルサラゼ、ウタ・ヴェヤント、ウー・イン、ディーナ・ヨッフエの諸氏。

コンクールの最終結果は、第1位ジャン・チャクムル（20歳、トルコ）、第2位牛田智大（19歳、日本）、第3位イ・ヒョク（18歳、韓国）、第4位今田篤（28歳、日本）、第5位務川慧悟（25歳、日本）、第6位安並貴史（26歳、日本）。日本人作品最優秀演奏賞＝梅田智也（27歳、日本）、奨励賞＝アンドレイ・イリュシキン（23歳、ロシア）、室内楽賞＝ジャン・チャクムル、聴衆賞＝牛田智大、札幌市長賞＝ジャン・チャクムル、ワルシャワ市長賞＝牛田智大。

最終審査には、第3次予選での演奏内容も加味され、選曲の妙も生きてチャクムルが栄冠に輝いた。今後、オーケストラとの共演やリサイタル、レコーディングの機会も与えられる。

それぞれが激戦だったこのコンクールでの貴重な体験や、青春期に浜松で得た見聞を糧にして、真摯に研鑽を積んで、世界に大きく羽ばたいてほしいと願っている。